

報 告

近畿病院図書室協議会第98回研修会
—事例・研究報告会—

研修部

日時：2002年3月25日(月) 10:00~12:00

場所：ペアーレ神戸

参加者数：会 員25名

非会員1名

プログラム：

1. 雑誌「病院図書館」読者アンケート結果報告
神奈川衛生学園専門学校 瀬戸嘉枝氏
2. 患者図書サービスへの取り組み
医真会八尾総合病院 福田香織氏
3. 図書室業務を振り返って-主婦から司書へ-
富山市民病院 高田幸子氏
4. 医学図書の寿命について
京都南病院 山室眞知子氏
5. 臨床ガイドライン作成作業からみた国内医学文献データベースの検索とその結果の比較検討
国立京都病院 小田中徹也氏

今回は、図書室の業務に直接関わる事例の報告とともに、近畿病院図書室協議会の会誌である「病院図書館」の読者アンケートの報告など、バラエティに富んだ内容となった。

第一席のアンケート結果報告では、回収率は低かったが、会誌が会員への啓蒙だけでなく、いろいろな読まれ方をしていることが示唆された。当日の参加者の中にはアンケートが同封されていたことに気付かなかった方もいたが、会誌についての評価は概ね高いといえるであろう。この結果の分析は今後の会誌編集に役立つことと思えた。

第二席は患者図書サービスへの取り組みについての報告である。患者への医学医療情報の提

供が病院の責務となりつつあるが、その場として図書室が果たす役割は大きい。図書館サービスの新たな展開としての取り組みの検証と実践を今後の参考にした。

第三席は新たに司書が配置され、図書室業務が機能してきた現状報告である。たとえ半日勤務という制約の中でも、職員が配置されることが、組織の中での図書室の存在を明確にする上で重要であると考えられる。

第四席は、貸出方法の変更に派生した、研究報告である。日常、図書に接していて、漠然と感じていた図書の利用寿命について、今回は数値として提示された。発行年と利用件数からみて医学書の場合、約7~8年が限度とのことである。比較的利用寿命の長いものも紹介されたので、収書の際の参考としたい。

第五席は昨年度より継続している臨床ガイドライン作成作業の経過と検索結果の報告である。EBMの高い情報を収集し、提供するには今後の図書館員の専門性を高めて行く必要がある。今回の報告では、データベースによって得られる情報量の違いが、印象に残った。整合性を求めるための煩雑な作業をこなしてゆくためにも、専門的な知識が必要になってくる。これからは情報化社会に対応できる図書館員となるための研修活動が必要であろう。

今回の発表ではパソコンを使った、プレゼンテーションが増えた。事例・研究報告会は発表の技術を養うための場としての役割を担っている。身近な話題から研究報告まで、今後もさまざまな話題を提供してもらいたい。

(文責：林 伴子/社会保険神戸中央病院)